

甲南大学 総合研究所報

甲南大学総合研究所

〒658-8501

神戸市東灘区岡本8-9-1

電話 (078)435-2331(ダイヤルイン)

第46回 甲南大学総合研究所公開講演会

「平生夙三郎、今に繋がる日伯交流基盤構築への埋もれた偉業」

平成20年7月26日(土)

講師 栗田政彦氏

(栗田工業(株)前監査役・(財)日伯経済文化協会評議員)



安西所長：

皆さんこんにちは。本日は非常に暑い所、甲南大学総合研究所の公開講演会のために御来場くださり、大変ありがとうございます。私、今年度から三度総合研究所の所長を仰せつかりました安西と申します。本日は第46回の講演となります。今年は「笠戸丸」が神戸港からブラジルに赴いて、ちょうど100年

ということで、あちらこちらで日伯親善の事業なり行事が行なわれております。そこで、本年は甲南大学の母体である甲南学園の創立者の平生夙三郎が日本とブラジル関係において忘れられていますけれども極めて重要な役割を果たしているという事でもありますので、長くブラジルにおいて、お仕事をなさっておられました、栗田政彦先生をお招きして、

「平生夙三郎、今に繋がる日伯交流基盤構築への埋もれた偉業」、「平生の人生と日伯関係の大転機となるブラジルロマン旅行」ということでお話を頂くことにしました。栗田先生は1963年に甲南高等学校を卒業され、慶應義塾大学経済学部を卒業され、栗田工業株式会社に入られて、ブラジルでの17年間を含めて、海外勤務を25年なされました。この6月に栗田工業の監査役を退任され、もっぱら現在は日伯関係の色々な事について研究されたり、或いは活動されておられます。栗田先生のそういった自らの体験と現在研究されている事を踏まえて、平生夙三郎が日伯関係にどのような役割を果たしたのか、それから今後日伯関係はどういう意味を持つのかということについてお話を伺いたいと思います。その後、コメンテータとして甲南大学経済学部の草野正裕先生にコメントを10分間ほどして頂きます。草野先生は一昨年スタンフォード大学に留学され、そこでブラジルへも赴きになり、平生との関係においても研究されています。その次に、甲南学園及び甲南病院の理事長であられた小川守正先生にもコメントをして頂きます。小川先生は大地に夢を求めてという視点から、初めて平生夙三郎が日本とブラジルとの関係においてどのような役割をしていたのかという事を公にされました。神戸新聞の出版部から出されている本ですが、現在残念ながら絶版になっております。ブラジル移民と平生夙三郎の軌跡という事において書かれているということもございまして、やはりコメントして頂く事にしました。最初に栗田先生に90分くらいお話をさせて頂いて、後5分くらい休憩を入れます。その後草野先生と小川先生にコメントして頂くという段取りで行きたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。ではまず栗田先生

栗田先生：

ありがとうございます。皆様こんにちは。只今ご紹介頂きました栗田でございます。どうぞよろしくお願い致します。本日は46回という伝統ある講座の中でお話をさせていただきますことを大変光栄に存じます。本日は今ご紹介頂きましたテーマでお話をさせていただきます。

平生先生は神戸を活動の拠点とされ、また甲南小学校・学園の創立者でもありますので、本日お集まりの皆様の方々は平生先生をご存知の方も多いかと思います。只、巨人平生夙三郎の活動分野は非常に広くて、全体像がかなり掴みにくい所もありま

すので、一般的には余り知られていません。

先月平生先生の故郷の岐阜県でお話をさせて頂きましたが、お集まりの6、70名位の中の5、6名の方がご存知で、さらにブラジルのこととなりますと殆ど知られていないのが実情でございます。今年は先程、安西教授からお話がありましたように、日本人のブラジル移民100周年記念の年でございます。本日はブラジルを軸にして少しお話をさせていただきます。平生とブラジルそして、その全体像の中で平生がブラジルにどう関わったか、少しでもお伝えできればと思います。どの程度お伝えできるか不安でございますが、よろしくお願い致します。

(巨人平生夙三郎像)

まず、甲南学園学生資料館にあるしおりに経歴の要点がございますので、広い分野で活動した平生がどんな分野で活躍したか、少しまとめの意味で簡単に触れさせていただきます。

平生は幕末下級武士の田中時言(たなかときなり)の三男に生まれます。そして東京海上の中興の祖といわれるくらい実業界、経済界で大活躍を致します。その他社会事業、教育、政界で大活躍を致しますが、その中に埋もれた偉業がたくさんあると思います。その偉業の一つが民間外交と移民政策の大改革などのブラジルに関して行ないました業績や考え方であり、埋もれた一辺もここにあるかと思えます。お手元のコピーの中にもブラジルという一字は出ておりません。いかに埋もれていたかという事が少し理解して頂けたらと思います。

平生の活動分野をこのしおりでは七つの顔で分類しています。

- 1 実業家(財界人)として
- 2 経済人
- 3 社会実業家
- 4 政治家
- 5 教育事業家
- 6 教育者
- 7 育英事業家
- 8 ……?

ブラジルをこれらのうちどの顔にするか、どの分野にするか非常に悩ましいところがございますが、ご一緒にお考え頂ければと思います。平生のブラジルとの関わりは、人生の中でも非常に少ない時期、時間でございますが、彼の合理性と世界観を研究するにおいても、決して欠かせないものだと思います。彼はブラジル旅行を2度やっておりますが、副

題に出しましたように、第1回の旅行が彼自身の人生の大転換並びに新たな日伯の交流の夢と実践というものを求めた、ロマン溢れたものだと考えます。この辺を中心にお話をさせていただきます。

(私の平生先生との出会い)

最初に私と平生先生との出会いと、平生先生の馴染みのない方もおられると思いますので、少し年譜をお話致します。それから本題として世界観から日伯交流への平生の考え方と偉業についてお話をさせていただきます。時間がありませんでしたら最後に少しブラジルについてと、これからの日伯交流もしくは日本の世界の在り方をどうするかという事を平生先生に絡めてお話をさせていただきますと思います。

まず私が平生先生を研究しなければならないと思いました理由が二つございます。一つは先程紹介頂きましたように、高校まで甲南にお世話になりました。その後仕事の都合で2回17年間程ブラジルにいました。その時に移民や外交交流関係で平生経済使節団という単語が幾つか出ていたのですが、交流史に書かれてあるのはわずかに2,3行という事も言い訳になりますが、その時は甲南の平生飢三郎と使節団の平生飢三郎とが全く結びつきませんでした。大変申し訳なく思いました。

二つ目の理由は社会活動を通じてです。10年程前に日本に帰って参りまして、年齢的にも何か社会活動をしなければいけない、その世代になってきた時に何ができるかと考えましたら、やはりブラジル関係のボランティア、或いは今までやってきた経営に関するボランティアだと思いました。ブラジル関係のボランティアとして、日本に今いる32万人程の在日ブラジル人を支援するNPOを立ち上げ、その中で親に連れられてきた子供たちの内約15,000人が学校に行っておりませんので、こういう子供たちや親達への生活支援活動を始めました。

もう一つの活動は財団法人の日伯経済文化協会でございます。ここは戦後日本が焦土化しました時に、ブラジル移民の子供達から老人までが当時のお金で約11億円の義援金や品物を送ってきました。これはアメリカのララ資金を通じて来ていますので、殆どの方はブラジルから来たという事をご承知ないかと思えます。それくらいブラジル移民社会が立派に形成されており、日本へ義援金が送れたのです。当時の11億はかなり大きなお金ではないかと思えます。この資金を受け皿として設立されました財団で、私はララ資金を通した移民社会からの義援金

のお話を語り継ぐ事と、移民史を、特にブラジルの移民史を学習致しました。最近近代史の中で日本の国策とされました海外移民という事が殆ど取り上げられておらず、教科書でも8社程のうち2社位しか書かれておりません。そんな時に平生飢三郎が移民事業にも深く関わっている事を知り、大変恥ずかしく思いました。ここにおられます小川さんが平生とブラジルの著書を出されましたので、直ぐお尋ねしまして勉強を始めました。その後平生研究会、今日ご紹介頂きました安西先生や高阪先生他皆様方にご指導を仰ぎながら、ブラジルと平生の位置づけという事を今研究させていただいております。

(平生の年譜概要とブラジル)

それではレジメの二(2. 平生の年譜、○要約一覧、○「人生三分論」体系化とブラジル渡航)に入ります。まだ研究の途中でございますのでどれだけお伝えできるか不安ですが、まず平生の年譜を見ながら、ブラジルでの業績がどの辺に位置したかという事を感じて頂ければと思います。

これは甲南の資料からですが、誕生は飛ばすわけには参りません。1866年、明治維新のちょっと前に、今の岐阜市、加納藩の武士として田中時言の三男として誕生します。1886年21歳の時に当時在学する東京外語学校が教育改革で廃止になり、生徒は全部放校されます。その後現在の一橋大学の難しい編入試験に合格しますが、入学金が工面できず平生家の養子となります。ここに平生飢三郎が誕生するわけでございます。1890年に25歳で現在の一橋大学を首席で卒業しますが、1894年、東京海上保険にスカウトされて入社します。入社早々の会社再建やその後の企業成長に大活躍して、先程申しましたように中興の祖と呼ばれています。この年譜には欠けておりますが、1924年から翌年にかけて、先程申し上げましたように平生は第1回のブラジル訪問しております。それは世界旅行、自伝には世界漫遊と書いてありますが、漫遊旅行の途中ニューヨークからイギリスへと大西洋を渡る時に、ブラジルに立ち寄っています。当時はご想像頂きます様に船で動くわけですから、今以上に遠い感覚の所をニューヨークからブラジルに立ち寄っています。私はまずこの点にビックリ致しまして、何故わざわざブラジルに立ち寄ったのかというのが不思議でございました。如水会の講演記録の中にその答えがありました。「教育問題などが国家の問題になっている、人口では過剰人口をいかにするかという事が大問題で、行

くところがないならばブラジルはどうかと考えていました。只それまでの諸報告も合点がいかない、だから自分でちょっと見に行った。報告と余り変わらない、見て良かった」、こういう講演記録がごさいます。1925年以降の時代は平生に対する世の中からの要請で年譜が溢れんばかりの状態になっていて、多くの分野での活躍が始まります。世間と時代が平生を要求したのではないかと思います。先程の七つの顔、或いはそれ以上の活躍がこの時代から始まると言えます。

次に1931年に本日のテーマの一つであります海外移住組合連合会の会長となります。平生がブラジルへの具体的仕事に携わる時期であります。1935年には70歳の高齢にもかかわらず、政府広田弘毅外相の強い要望で経済使節団の団長としてブラジルに参ります。この時期の年賦はお手許にコピーが配られていると思いますがその仕事量をイメージして下さい。原本は『平生夙三郎自伝』の年賦ですが、B5版で6.5頁ページございますが、そのうち何と4.5頁が60歳以上からのものがございます。1936年に今度は首相になりました広田弘毅からの要請で文部大臣に就任をしております。この時71歳です。安西教授の論文によりますと、70歳からの十年というのが、平生にとっては実業的職務から国家的職務への大転換期と言われております。まさにその通りだと思えます。1945年80歳で逝去されますが、日本の明治という近代化の始まりの直前に誕生され、敗戦の翌年、ちょうど日本の第一次近代化が終焉したとともに人生を閉じられ、休みなく仕事をされた偉人であるというように私は感じました。

(人生三分論)

平生の人生を語る時に有名な言葉としまして、人生三分論というのがございます。すなわち人間の完全な人生は3つの時期の過ごし方にあるとされています。これを切り口に少し平生像に迫ってみたいと思えます。平生は3つの時期とは、第一期が修業の時代、他力に頼って生きる時期、第二期を独立の時代、そして第三期を社会奉仕の時代、他人に力を貸すべき時期としております。まさに平生はこの3つの時期を実践して、人間として完全な人生を成就した方というようにも感じました。平生が漠然と考えていましたこの三分論を体系付けたのは、1924年に世界旅行の時ブラジルに立ち寄り、その時船の中で読んだ本がきっかけでした。アメリカ人から贈呈されたエドワー・ボックの自叙伝を読み、平生は我が

意を得たとして、東京海上の専務の辞任を決意します。59歳の時です。第三期の人生の実行に専念する大転換期となります。その他ブラジルから戻る船の日記の中でも、いくつかの事の決意を表しています。一つをそのまま読みますと、「余は今回の外遊により得た知識を利用して、余の新生涯をして真に国家的、社会的意義あらしめん事を思う毎に英気の躍如たるを覚える」というように、第三期への決意が現れております。60歳の時でございます。この事からも副題にしましたように、世界旅行というよりもブラジルへの第1回目の訪問というのは人生の大転機でありました。でブラジルの重みと言いますか、ブラジルと平生の縁というものを改めて感じる次第でございます。

ここでご存知の方もたくさんおられると思いますが、少しボックについて触れてみます。ボックはオランダ系のアメリカ人で、苦勞して出版事業等で成功し名のある編集者となります。平生は59歳の今日まで幾千もの内外人に会見し人生を語り、また読書をしました。『ボックのように自分と同じ意見を持ち、かつ実行した人を見ず。』というように感動して述べております。余談ですが、私もその自伝をばらっと読んでみました。別の章に39章ですが、ボックのアメリカへの感謝の気持ちがあります。非常に面白い所でございますが、感謝の気持ちが奉仕の気持ちを取りたせると述べております。平生も同じように自分の学習資金は国が出してくれ、それが一つの社会奉仕の動機になっており、恩を忘れないというように書かれております。似たような所がございます。平生のその時の感動とボックの自伝の要約が、1924年の11月29日の日記にございます。詳細は省きますが、船に乗る前にこの本を読めば、著者を訪ねる事が出来たのに非常に残念だというように記しております。平生の日記にあるボックの平生の日本語訳で、定義は彼自身の日本語になっております。余談ですが、全くこれとは別個になりますが、最近渡辺昇一氏が『人生を作る言葉』という中でボックの言葉に触れております。こういうように第三期への転換をブラジルというものと深く結びつけられた平生であると思えます。

(信念と合理性)

少し順序が逆になりますが、第一期修業の時代の中から一つ、二つお話をさせていただきます。修業の時代というのは父親の教育から始まりまして、学校や世間それから独学を含めまして、ものすごい学びと

修行をされた方でございます。最初の学校、岐阜市の加納小学校は今も現存し、昨年平生研究会で訪れて参りました。自伝には自分が8歳の時に教育令により小学校が出来たと書いてございますが、教育令の小学校が出来て入った初めての学校がこの学校だと思います。この学校の中に平生が文部大臣になった時に贈呈しました扁額がございまして、「正しくは何を恐れん人の道、強く朗らか進め諸人」と書いてございます。私は平生を学習する中で、何をすることもこの人は軸がブレない人だと思っておりましたが、その根底を探しているうちにこの自筆の扁額に触れ、この正しい事をするという概念こそが彼の軸だということを感じた次第でございます。この修業の時代でもう一つだけ取り上げておきたいのが、1886年に養子にいき、田中鈞三郎から平生鈞三郎に変わる時でございます。この時養子元の平生家と契約書を交わしています。それは自分が養子になるのは田中家再興のため、田中家との行き来、また世に出ても自由にするという養子の契約書です。ま、サインをした方も立派ですけども、平生の合理主義が見事に表れていると思います。この合理主義があったからこそ、その後のビジネス界や社会奉仕の時代で多くの偉業が残せたのではないかと考えております。後に平生はこの合理主義、合理性につきまして、世の中には合理と不合理と非合理があると言っております。非合理とは人間生活にはなくてはならない事だから頭を下げる。しかし不合理には絶対に屈しないと、こういう事を言われています。この合理主義というものが、彼が経営を進めていく上で非常に大事な事であったのだと思います。

(平生の世界観とブラジル観)

次に(3. 平生の世界観とブラジル観、○日本と米国、中国、○日本の課題とブラジル、○移民・拓殖の在り方、○国際関係の基本と日伯交流、○その他)に入りますが、年譜からある程度の平生のイメージをお持ち頂けたかと思います。ブラジルを含めた世界観というのは、世界旅行の中である程度整理とかまたは新たに形成された出来事だと思います。ブラジルの偉業をお話する前にその背景となります世界観やブラジル観に関しまして前後の発言を集めながらご紹介したいと思います。単に概念的でなく、関連行動に結びついていて、これがやはり平生のすごいところではないかと思えます。ブラジルの偉業に関しても、殆どの概念、理想が行動と結びついております。

まず、当時日本におきましては第一次大戦とか関東大震災の経済問題、中国を巡る欧米との覇権争い、それから中国派遣や満州侵略の日中間の問題がございました。さらには近代化が急激に進み貿易摩擦や資源確保の問題が山積みしている時代でございました。大正の自由主義からちょうど軍国主義という暗い時代に入っていき時代背景かと思えます。まずアメリカ観については、世界旅行で初めてのブラジルへ行く途中寄りましたアメリカで、それまで自主規制だった排日移民法案がちょうど法律として成立し、その事等含めましてたくさん書いています。少しご紹介しますと、日本は実力を養うべきだ、感情で論じたりするべきでない、排日移民という侮辱を受けたのは所詮実力がなく、アジア全体もないからだ、頑張れ、とこういう事を書いています。

2番目は米国と争うべきではないと言っております。巨額の余剰を有する国、戦争などもっての外だ、思うがままに軍拡をさせ国費を乱費させて疲労を待つべきだと。それから3番目にあげましたのは、アメリカを見まして繁殖力が強い黒人が精神的知識的に向上すれば白人との地位逆転も可能性もあり得ると、なんか最近起り得そうなことを言っております。中国については隣国中国と仲良くするべきであり、満州移民に関しましても、すでにもう3000万人の中国人が住んでいる満州に500万人もの移住者を入れる余地はないと言っております。この辺は小川さんの著作の中に臨場感溢れて描かれております。アメリカに関しましては、アメリカは自由主義通商に反し、大戦後の不況で保護貿易に変更しつつある、自由通商がなければ国際関係は行き詰り、ひとり勝ちのアメリカ経済にも係らずアメリカの債権国から輸入に高い関税を掛けていると述べております。最近でもこういうことがあったような気がします。日本は自由主義を推進せよ、日本も同様に自給自足論に従って関税障壁を授けて他国製品の輸入を規制すれば、生活レベルの低下と人減らしを覚悟しなければならないと。ブラジルとの課題については、日本の課題は製品市場と過剰人口への対応であると言っております。人口軽薄に悩むブラジルこそ人口過剰に悩む日本と共存共栄の地であると、最初のブラジル訪問の時にこういうコメントを出しております。一方は立派な工業国、一方は農業国、その間に物資の交換が行なわれないはずがない。現在はあまりにも交流が少ない、日本には原料がない、外国から買うのは仕方がない現状である。平生

はブラジルに関しまして、この地は一獲千金の国ではないと、農業国であり、移民は農業従事者を主体にして工業労働者、さらに高等教育を受けた電気、機械など技術者、医師等多職業の人々で構成すべきだと、移民拓殖の在り方を述べております。要するに多職能と多機能移住地を提唱しているわけでございます。労働と資本が一体となった移民成立が必要であると、いくつかの提言と意見を述べております。日伯交流など国際関係に関して、交際関係はギブアンドテイクがモットーであり、通商経済関係がなければ基盤脆弱であると。こういう事を勉強していきますと平生の世界観というのは、ブラジルは日本の課題解決に最適の国であり、外交上も非常にバランスを重視しているとわかってきます。すなわち、当時の世界の覇者アメリカや最重要の隣人中国との対応、そしてそれらの補完関係の重要な国としてブラジルとの関係強化、こういう位置づけをしているように私には思えます。

(平生鈺三郎、今に繋がる日伯交流基盤構築への埋もれた偉業)

それでは本題に入りますが、平生とブラジルの偉業という事でお話をさせていただきます。3つの偉業を合わせまして、大きなタイトルで日伯交流基盤構築への偉業と致しました。

「偉業その一」:

海外移住組合連合会会長(1931年)として、移民・拓殖政策改革ならびに多機能日系社会基盤構築への道筋。

「偉業その二」:

訪伯経済使節団团长(1935年)として、通商拡大ならびに資源外交推進案提起と具体化の推進。移民制限緩和。

「偉業その三」:

訪日ブラジル経済使節団の国賓招聘実現(1936年)と近代国家日本と日本人への認識を高める。飛躍的通商拡大と文化交流開始等の大成果の短期間での提示。

「偉業の総和」:

二国間相互理解、移民、経済、文化の本格的交流と戦後関係の早期回復への道。

(偉業その一)

移民事業というのは色々ありまして、いろんな方がなさっています。日伯交流もいろんな方がなさっています。只、平生ほど包括的且つ国家的な日伯交流、それも民間外交を含めてこれだけの事をしたと

いう方は、ブラジルだけではなく他の国との関係においても民間人で余り思いあたらないかと思います。先程から申しております平生のブラジルへの想いと最初のブラジルの旅行がなければ、まずこの偉業その1がなかったと思います。偉業その1がなければ2も3もブラジルに関する偉業はなかった。こういうものが重なり合ひまして今日に繋がります日伯交流の基礎を築いてきたと思います。かような観点からお話をさせていただきますと思います。

まず偉業その1ですが、長いタイトルとなりましたがこれだけに縮めるのもかなり苦勞しました。簡単に言うと、海外移住組合連合会というのは海外移住、植民地を作る国策の会社です。初めてのブラジル旅行で見聞しまして、正しい事と確認しました平生自身のビジョンを、この会長になりまして遂行していきます。また時代が(平生は1931年に就任しておりますが、1929年に組合連合会は設立されております。)ちょうど31年に浜口首相が襲撃されて幣原代理首相の時に平生に白羽が立っております。当時の拓務大臣から何回も要請されてはいますが、平生は謝絶しております。多忙と移民事業に経験がないことが理由ですが、それでもその要請に応じて重要な国家的事業と受け止めてやらなければいけないという事で受けます。只、受託の条件として平生は個人の育英事業の拾芳会(しゅうほうかい)の一番弟子でありました、宮坂国人氏を現地の最高者として送る事を一つの条件にしております。2番目の条件は自分に全権を任せる事です。この2つを条件に会長就任を受託し、平生はシナリオをどんどん実現していきます。就任の報告の時に、平生はブラジル、特にブラジル移民政策に関する我が国の方針を樹立したいという事を言っております。そのために地方の組合他、自己の利害を第二として事業発展を目的とすれば必ず協力が得られるはずだと、こういうようにまず抱負を語っております。宮坂を現地に派遣しまして、実態調査をしながら計画案を進めていきます。この調査の中から後ほどお話しする計画と成果が出てくるわけです。偉業そのものの話に入る前に少し日本の移民史というものを頭に入れて頂ければ、これからの話の背景がわかりやすいかと存じますので、少しお話をさせていただきます。

(移民小史)

まず日本の移民の始まりですが、ご承知のように平生が誕生いたしました明治維新で武士制度が廃止され、大量の武士が失職しています。約200万と言

われます。人口が3400万位の時でございます。政府は移民創出を一つの国策にします。まず始まりましたのが、1885年のハワイへの移民です。当時はハワイでサトウキビ畑の日当が12.5ドルと資料にございます。当時日本の大工さんの日当が15銭、約100倍と言われる出稼ぎ収入です。このハワイ移民からの年間送金金額は約250万ドル、単純に今のお金に計算しましても2.30億円の送金が既にこの頃から始まっていたと言えます。ブラジルの受入事情、こちらはもっと複雑です。ブラジルが移民を、欧州移民特にポルトガル人とイタリア人を受け入れたのが1874年です。1850年頃から奴隷貿易禁止などで奴隷

(ブラジルの受け入れ事情)

1874年欧州移民開始(葡、伊人)
1889年奴隷制完全崩壊
1889年帝政から共和制へ (SP州の国政への影響増。東洋移民要請)
コーヒー輸出比率67%。世界80%
1890年東洋移民禁止法 国会の承認事項(州の特別事情考慮可)
1892年SP農園主日本よりの移民要請
1894年SP州再度の日本移民要請 補助金提案
1900年ブラジル政府日本移民 へ補助金提案
1902年イタリアの移民送出禁止

解放の動きがブラジルでも出て参りましたが、有色人種や黒人がどんどん増えてきました。これに関して政府は白人化政策をやります。白人化政策のために欧州移民の受入準備を行ないます。1874年はそういうバックグラウンドであり、1889年に奴隷制は完全に崩壊します。イタリアがこの時大恐慌でもありヨーロッパ移民はどんどん増えて参ります。1889年はブラジルの歴史で帝政から共和制に移行する大転換期でございます。余談になりますけれど、ブラジルが帝政で帝国であったということをご存知の方は余りおられないのではと思います。頭の片隅に置いておいて下さい。これは後から申します文化交流、日伯の交流の中でも大きな位置を占めていますが、バックグラウンドとなります。文化的にはヨーロッパです。文明的にもヨーロッパなので例えば、旅客鉄道が出来たのが1853年、ちょうど今篤姫という

NHK大河ドラマが人気を呼んでおりますが、この時代です。ペリーが日本に来た時です。この頃から既にもう旅客鉄道があったという文明国家でもある事を念頭に入れて頂ければと思います。移民の話に戻りますけれど、ヨーロッパが好景気な時は移民が減りますので、サンパウロのコーヒー農園の経営者は東洋系の移民を求めます。この頃ちょうどコーヒーが最盛期で、ブラジルは世界80%の輸出を占めておりました。サンパウロ州は当然経済的には労働力として、東洋移民も含めた移民の招聘を考えておりましたが、政府は逆に有色化の防止のためにアジア・アフリカ生まれの者の入国禁止令を出します。最近日本では、外国人労働者のビザ等に関しましても、政府は余り良い反応を示していませんが、経済界は外国人労働者を盛んに入れようとしております。時代は変わっておりますが、これに関してはいつの時代も同じ問題があると思います。この有色移民の反対論に関しましては、後から出て参ります平生の第2の偉業で、ブラジルへの移民制限法の思想的な基盤になります。ただしこういう事を知りますと、有色人種として必ずしも歓迎されていない日系人が、ここまで評価が得られるまでに大活躍した事に、改めて敬服せざるを得ません。経済優先のサンパウロのコーヒー農園主は共和国政府に圧力をかけまして、東洋系移民を入れる時は国会審議が必要であると、法律の運用緩和条項を入れます。ただし否決された時には州の決議を優先するとしました。サンパウロはご承知のように経済でブラジルを支配しており、ブラジル=サンパウロという時代でございました。何回もサンパウロ州は日本政府への移民送出を要請しますが、日本政府は遠方で貨幣価値も低いからと拒否します。反面ハワイや北米はどんどん日本移民の規制を始めてきます。国内では日露戦争の後の経済問題、それから引き上げを含めた人口過剰問題を抱え、日本政府は待った無しの状況になりました。1905年に杉村^{かき}濬という有名な公使が移民の候補地を実態調査致します。これの報告書がブラジル移民事情という有名な報告書ですが、これを元にして第一回のブラジル移民船笠戸丸が出航し、政府が正式に移民を始めます。この頃はちょうどコーヒー価格も上昇し、移民の受け入れ態勢の熱も高まってきました。移民の始まりを申し上げてきましたが、移民は平生の時代にまでどういように動いていったかを少しお話したいと思います。問題を含みながらも1908年以降第1期といわれるブラジル移

民は契約農民を中心に発展して参りました。今申し上げましたように、日露戦争後の不況その他色々な問題で昭和になりまして、人口過剰が出てきます。1930年には日本の人口が6420万になったと言われていました。政府は先程申しましたような政策を取りまして、一旦29年にブラジル移民はピークを迎えます。ところが1930～1931年に急激に落ち込みます。色々な事情がありますが、政府の国策会社ははじめ色々な移民の送受の問題で移民の希望者が減って参ります。

(移民史への平生の登場)

この急激な減少の時に、先程申しました海外移住組合連合会の会長、第二代目の会長就任に平生が要請されました。ここでまた、平生の仕事と概要という本題に戻りお話させて頂きたいと思ひます。

先程申し上げましたように、平生は宮坂を送り調査をし、再建と移民送受の安定化のためのシナリオを書いていきます。まず一日も早く一人でも多く公的な移住民を連合会の買入れた土地に入植させるという目的を決めました。方針としてその分業の徹底をしております。ここでは、現地でのブラジル拓殖組合という現地会社、宮坂国人が率いますところの成果と業績をお話したいと思います。平生は事業経営、植民地管理で移住民への満足を買ひ、彼らをしてブラジル移住の利益を理解せしめなければならぬ、要するに移民がまず満足しないとうまくいかないと申しております。これは平生のいつものユーザー視点の発想です。どういふ事をやったかと言ひますと、まず移住地の現状に見合った経営改善をやりまひす。今でいう投資の集中と選択です。開発の推進の強弱を分け、休止や中止も致しまひす。それから経営効率、これが一番の経営的成果ですが、たくさんありまひた現地の国策移住地を統合致しまひす。当然抵抗もあり、加わらない所も一つありまひたが、これが功を奏しまひす。それから移民が入りやすいように土地の値段を引き下げたり、契約法を緩和したりしまひす。それから入植者の生産性増加を図り、その収入を増やす事を政策としております。さらに、平生がすごいなと思ひまひすのは、これだけではなくて移住地に公共施設を充実し、移民に定着性を持たせるようにしております。その結果どういふ効果が出たかという、移民送受数が回復致しまひす。もう一度のピークで1933年に最高記録を達成してあります。移住地農家の定住、生活環境改善と収入増、堅実な日系社会形成と機能の拡大、ここがやは

り後世に残る、今日に繋がる大きな業績かと思ひまひす。さらに隠れた業績になると思ひまひすが、国策会社の連合会の民営化に成功してあります。かなり国会の抵抗がありまひして色々な条件をつけてありますが、ブラジルの事業だけ民営化を許可してあります。これらの成果により日系社会の育成とブラジルへの貢献の基盤を作ったのではないかと思ひまひす。先程の成果の経済的例として1939年のブラジルのプラタク組合の経済調査結果をご紹介しますと、農業家族2400戸、1年間の純収入が円にしまひして904円です。ちょうど同じ頃の日本での農家の状態ですが、1924年の北海道の植民地のデータがあります、その時の平均1戸の収入が純収入でマイナス355円です。総収入もかなりの差が出てあります。自営の定着、農民の経済的収入を増やし安定させる結果に繋がりてあります。

次の大成果としまひしては、やはりソフトの面(戦略)からは多機能化を計るという事で、精米所を作ったり施設設計72件作りてあります。それから小学校を作ったり文化運動を推進してあります。また移住地の管理の自治体化を進めまひして、日系社会の自主運営を推進するといふ事も作りてあります。銀行とか商社機能、こういったものも作りてあります。こういうわけで最初に申しましたように平生が日本の国を心配して、ブラジルに最初に行きまひた時に理想の移民の地を造りたいと思ひた事がどんどん実現されていきます。これから偉業その2でお話しまひす時代です。この時まで日本人のブラジル移民は色々ありまひましたが、平生のこの連合会の成果もありまひして1930年代から急増し、ポルトガルと肩を並べるくらい送受してあります。国内も農村が凶作を含めて非常に疲弊しまひす。この時代に政府は一層の移民政策を強めまひす。この時に偉業その2でお話しまひす、経済使節団団長という平生の仕事が入りてまひります。

(偉業その二)

偉業その二に入りまひす。日本のこういう時代、政府が移民政策を強化しようとした矢先に、ブラジルでは日本人移民の排斥問題が出まひす。当時は革命政権から憲法政権に変わる途中で、ブラジルの新しい憲法は実質的に日本人に対する排斥運動となりまひす。少しこの移民制限法をご紹介しますと、日本人向けにはではなくて各国の移民を2%以内に制限する、年間の総計の2%の移民を受け入れるといふものです。日本の場合は2,800人以下となりまひす。イ

タリアは27,000人で、実質日本に向けた制限法といわれております。ここでお話をしたいのは、全てが（日本）移民に歓迎ではなかった事です。この制限法の根拠になりますのが、トーレスという人の日本人移民に対する排日論の根拠です。これが1934年の話ですが、その10年以上前に前提となる日本移民制限法が下院に提出されております。レース議員という人の提出ですが、これは日本人を特定したのではなくて黒人と黄色人種ということを対象しております。ただこの法案は逆に、移民関係の議員の良識と言いますか、上程が中止されております。非常に紳士的な議員の反対もありました。再度この排日の運動が1927年に起こります。これが1934年、実に7年間にわたりミゲル・コートという議員が中心になりまして排日運動を強めていきます。1933年11月の新憲法制定会議が開始され、憲法制定会議員としてトーレスが登場し、多くの同調者を集めて本会議に上程を致します。但しここでも人種差別的な明示は不適切であり、通常立法で検討すべきと本会議の送付が見送られるのですが、この一派が修正案を出しまして本会議で承認をさせます。これが今申し上げました2%制限法の成立です。

この時日本政府はかつて無い、前例のないアイデアですが、経済使節団をブラジルに送って日伯交流を深めながらこの関係を改善していきます。こういう案を外務省中心、とくに新しく大使になります澤田節藏^{せつぞう}の起案として出されます。この澤田節藏という方と平生夙三郎は姻戚関係にありますので、お二人が色んなお話をされた事も推測できます。これに対しまして、経済使節団の団長を誰にするか人選が決まりません。平生に何回も要請がありましたが、やはり高齢と忙しいということで一度は断っております。実際に平生はかなり悩み、やらなきゃいけないんですがどうしたらいいんだというような事を日記にも書いております。最終的には平生は受けますが、日記によりますといくつかの条件を書いております。まず平生はよその国が決めた法律に関与するわけにいかないと言っております。純然たる民間の経済使節団としていく事、団員の構成ほか使節団の運営の権限は(平生に)一任するという条件で受けます。こういう交渉をまず政府に対して行っております。それから紡績界の重鎮の参加が必要であり、この時すでにどのような形で交流を深めて経済交流のために綿花を輸入していくかというアイデアを出しています。こういう話し合いはすでに日本で

は出来ていて、それを意識しての発言としますが、日本政府に条件として紡績界の重鎮の参加が必要だと言っております。なぜかということ、ここが平生らしきところだと思いますが、「ブラジル国に対し要人をしていかに日本の実業家が日伯通商に重きを置き、通商関係親密拡大の意思強きことを示すためにその界における第一人者でなければブラジルからのアプリケーションわかるべし」と、このように日本政府に要求しております。ブラジル人はその界の代表は誰かわからないし、ブラジルには日本人がいるので使節団一行の中に重要な人がいれば、それがブラジル人に反映してブラジル人もそのように振る舞うだろうということで人選をまずしっかりしております。この経済使節団の方々の働きというのはすごいものがあったと思います。ちょうど100周年ということもあり敬服の念を込めましてスライドに掲載させて頂きました。こういうように無事使節団が結団され、平生は次にプロジェクト成功へのシナリオをどんどん煮詰めていきます。

まず平生の考え方は、国際交流は経済関係がなければ基盤脆弱だということです。その他いくつかの考え方をベースに方針を決めていきます。交流をまず親密にすることで移民問題への間接的解決を図るという基本方針を出しております。それから、親善の第一歩は何を買うかの調査と選択であると言っております。こういう基本方針を出し、それから目標を設定しております。現在の貿易額を従来の10倍から20倍にするということです。平生のすごいところは数量目標をきっちり出しているところだと思います。目標設定の理由としまして、只ぼんやり向こうに行って調査しても仕方がないと言っております。せめて従来型の10倍から20倍になればブラジル国民も日本との間における利害の一致を感得するに違いない。彼のベーシックなシナリオはここにあります。この時の日本とブラジルの貿易ですが、1934年には海外全部の移民からの日本への送金額が、当時のお金で約9,400万円といわれております。ブラジルには当時日系人15万おりましたので低く見積もって1千万円以上はあると思います。その中でブラジルへの貿易総額が600万円しかなかった訳ですから、平生が言うように、当時の貿易がいかに小さいかという事がここでもわかると思います。この時の方針やシナリオをどんどんマスコミに発表しながら効果を狙っていきます。当然こういう日本でのマスコミ発表はブラジルにもどんどん伝わって参ります。

いよいよ準備を整えまして使節団は1935年の4月8日に横浜を出発しましてアメリカ大陸を横断しまして5月16日にブラジルの首都リオに到着します。ニューヨークからは当時13日間の船旅です。この時の外交資料によりますと、当時のブラジルのヴァルガス大統領は一日縮めてニューヨークから船を着けるという大統領命令と言いますか要請を出しております。大統領は翌日アルゼンチンを公式訪問するという予定がありまして、残念ながらその通りにはならなかったのですが、もっと早く一日時間を取って、日本の使節団と話したいという意図があったかと思われまいます。言葉は悪いですが、平生は仕事を始める前に色んな所で色んな仕掛けをしております。先程出て参りましたマスコミに関しまして色んな事をやっております。一つ紹介致しますと、ブラジルに行く前にアメリカに当然参りますが、その中で、ニューヨークで記者を集めて記者会見をしております。ここにおられます小川さんの本にも非常に臨場感あふれて書かれていますが、当時日本はアメリカから綿花の輸入の70パーセントを頼って参りました。(インドからの輸入が途絶えたこともありましたが)日本からは綿布の、当時の外貨稼ぎの主力商品である綿製品の輸出が急増していることに対してアメリカがジャパンプッシングをしているということについて、1億数千万ドルの綿花を買っているのに200万ドルか300万ドル綿製品が増えたからっておかしいじゃないか、文句を言うなど堂々と反論しております。さらにブラジルに着きまして翌日リオの中央放送局でラジオを通じて、ブラジル国民に使節団の目的、目標を演説しております。約1ヶ月の滞在中での平生使節団の活動の内容を平生は使節団の帰国後昭和天皇にご進講しております。この時の草案原稿をベースにどういう事をこの使節団がやったかという事をお話したいと思います。

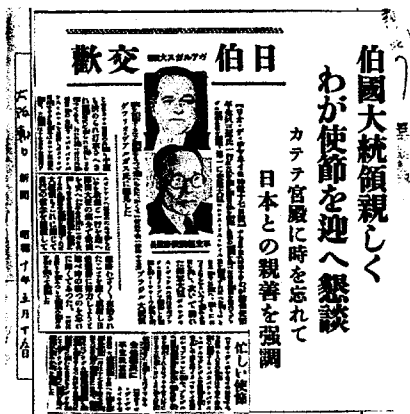
天皇陛下にご進講しておりますから、中身には嘘はないと思っておりますので、これが一番確かかと思っております。これに基づいてお話をさせていただきます。目的は経済関係密接化を悲願として同時に、この好機を利用して移民制限を間接的に緩和と努力することであると申しております。ブラジル政府は国賓の礼を持って一行を待遇してくれました。中央政府はもちろんの事、手分けして主な州を視察しました。各地で想像以上の丁寧親切極めたる取り扱いを受けました。ここで手分けして主な州を視察するというように報告されてはいますが、この事は単に中央政府の

日伯交流基盤構築への偉業 平生の天皇陛下へのご進講原稿要点

- 目的：経済関係密接化を主眼。同時にこの好機を利用して移民制限間接的に緩和の努力する。
- ブラジル政府は国賓の礼を以て一行を待遇。中央政府は勿論、手分けして主な州を視察するにおいても、各地で想像以上の丁寧親切極めたる取り扱いを受けた。
- VARGAS大統領はアルゼンチン公式訪問際に謁見、その他政界実業界の要人至る処で親しく会談をする機会。
- 特に、最終の一週間は外務省で日々協議会開催。棉花、輸出品部等5部門に分け双方で自由討議。
- その結果、南米の大農業国且つ絶大な将来有するブラジルより如何なる工業原料を日本に輸入すべきか十分な調査を完遂。
- コーヒー代替輸出品必要。棉花栽培ブラジル政府奨励。しかし、ブラジル官民は経験浅く国際商品として処理する点に知識体験とも不十分と認めたので、栽培から運送等各般の事項に適切な勧告をブラジル当局に致した。
- 日伯の新紀元はブラジル棉花の取引より、始まり其の実現は遠くないと確信。
- ブラジルには移民制限あるが排日とか抗日とか名づくものはない。移民制限も徐々に緩和。
- 日伯両国の親交は年とともに益々密接を加わる一途を進むのみと存じます。

役人だけではなくて、当時力を持っております主な州の要人や民間人との接触を深めます。第3の偉業でも申し上げますが、ブラジル人との繋がりが出来て参ります。ブラジル政府が使節団を国賓の礼をもって迎え、国賓として扱ふ事によりマスコミの対応が変わって参りました。この国賓の礼を持って扱ふという事に関しまして、平生は最初二度拒否しております。謝絶しております。これはブラジルに着く船の中ですが、外務省からの要請連絡に対して拒否しております。将来もしブラジルの経済使節団を日本に招く事があった時に、日本政府はとて国賓では処遇しないだろうし、そんな事したらブラジル人は侮辱されたと思うだろうと、平生は理由をこう述べております。それは国際交流、日伯交流に関して決して良い影響を与えないという事で二度謝絶して、日本政府の約束を得て三度目でようやく受け入れられます。平生自身もちろん国賓として待遇された事のメリットはたくさんあったのですから、これ一つに係りまして平生は常に色んな形で将来を考えております。第3の偉業でこの辺はお話致します。当時のヴァルガス大統領は先程申しましたようにアルゼンチンの公式訪問がありましたので、その間に謁見をしております。只この会談内容は十分わかりませんが非常に親しく会談をし、その後の関係も出来たのではないかと申しております。それから平生

は報告の中で、特に最終の1週間は外務省で日々協議開催、綿花輸出の商品部等を五部門に分けて双方で充当し、双方で自由討議をしたとしています。この双方で自由討議をさせたという事も一つ大きな使節団の成果であったと思います。というのはブラジルのエリートと日本のエリートが一緒になって1週間に8回、分科会で討議をしております。その結果南米の大工業国かつ絶大な将来を有するブラジルからいかなる工業原料、どのような種類の工業原料を輸入すべきか十分な調査を完遂したと、言い切っております。天皇の前で調査を完遂したと言い切っております。それは後で申し上げますが、十分成果を出すだけの事をやっております。当時の新聞で平生とブラジル大統領が親しく会談する記事、こういう記事がどんどん流れております。ご進講の草稿を続けますと、コーヒー代替輸出品が必要だということで、綿花栽培をブラジル政府は奨励しております。コーヒー価格が暴落してきた時代です。しかし綿花を輸出するにはブラジル官民は経験浅くて国際商品として処理する点に知識・体験とも不十分と認めたので、栽培から運送までの、各班の事項に適切な勧告をブラジル当局にしましたと、実に懇切丁寧な勧告をしております。この辺が先程の人選と繋がって参ります。ブラジルの綿花を国際商品に育てる、と



いう事であります。それから日伯の新起源はブラジル綿花の取引より始まり、その実現は遠くないと確信していると陛下に報告しております。ブラジルには移民制限法があるが、排日とか抗日とか名付くものは無いと、移民制限も徐々に緩和されると、日伯両国の親交は年とともに益々密接になる一途を進まんとお思いますと報告をしております。その中の綿花奨励の特別勧告をして、ブラジルの綿花が国際商品

として成長し日本にもどんどん輸出されるよう技術的ノウハウを提言しております。結果ですが、まず綿花の輸入目標総額については2000万円から2年後には6000万円になっております。それから綿花輸入量の拡大に関しましては2年間で248万トンが5114万トンと、経済的な効果を大きく、短期間で、伸ばしております。さらに日系農家の綿花栽培がどんどん増えております。日本の移民が自営農家として定着し、そういう中で綿花の栽培も急増することに対応が出来、第1の偉業がこの辺にも繋がっているかと思えます。それから綿花以外に多くの報告書を出しております。6項目にわたる提案と要望書を出しておりますが、これは6番目の勧告でございます。両国の職員が共同で今回の報告書の実現を進めていこうというふれあいのある提案であります。それからこれは第3の偉業に通じますが、平生の要望としてブラジルの経済使節団の日本派遣を要望しております。これが翌年実現致します。このように経済的な効果を短期間で上げる調査を勧告し、1年間でもかなりの綿花を輸入しておりますが、使節団そのものの成果はまず準備・調査をして日伯交流が次に繋がる準備をしたという事だと思えます。それからここで一番大きいのはこういう日伯交流を両国の要人が親しく話し合ったことです。それまでは日本から見るとブラジルは南米の非文化国であり、ブラジル人から見ますと移民を通じてしか日本をイメージしてない。これが日本からの当時のエリート、ブラジルもエリート、この方達があちこちで接触する間に両方の国を理解し、相互理解が進みまして、これがその後の交流に大きく影響して参ります。

(偉業その三)

第三の偉業についてのお話に進めます。平生の提言でブラジルの経済使節団が日本に参ります。先述の平生の交渉で、当然、政府は国賓として待遇致します。この使節団の成果として先程数値にも出ておりますが、平生使節団の目標を、実現を、推進致しました。ブラジルの取り組み姿勢を本格的に構築できたという事です。それからブラジルの綿花輸出だけではなくて、今度は逆に日本の輸出も3倍以上に急増しております。

成果の2番目が、この日本と日本人への認識の変化です。これが第3の偉業として、ブラジルから経済使節団が来たこと、しかも国賓で待遇したという事で、日本に対する意識が完全に変わって参ります。来た連中だけでなくマスコミの報道が連日の

ようにブラジルでなされます。ブラジル国民の意識も変わって参ります。

それから3番目の非常に大きな効果は、ブラジル主導の積極的な文化交流が始まるという事です。ブラジルの当時の新聞のミッションに対する報道ぶり、こういう報道が連日の様になされていきます。これは平生主催のレセプションの模様を伝えるブラジルの新聞ですが、こういう事を通じましてブラジルの国民も日本というものが、移民のイメージだけじゃないという事を認識していったと思います。ブ



ラジル文化交流の例としまして、ブラジルはリオに日本文化協会を設立し、教育界では日本熱が非常に高まって、小学校で日本紹介の授業を取り入れています。一方日本の現状はといいますと、日本にはイギリスなんかですと文化協会、フランスですと日仏協会というのがありますが、残念ながら未だにこういったブラジル文化協会を作っていないのです。それから先程排日運動の根拠となるトーレス論と申しましたが、このトーレス氏の長女が副館長を勤めます人類博物館に日本の考古学で有名な鳥居博士を招待しまして、考古学界の講演をしております。これは実質的にトーレスの排日論を止めたというようにとらえられるかと思います。こういうようにブラジルからの使節団は平生使節団の経済目標を推進する事、それから文化面での交流、それからより一層の人と人のふれあいを高めました。

(三つの偉業の総和)

今まで申し上げました3つの偉業を総和致しますと、両国の指導層ならびに国民が双方の国情認識を改め、移民・資源・通商・資本、こういったものをリンクさせた上に文化交流も含めて、本格的な両国の親善交流関係を2年間で構築させたと言えます。

平生使節団が礎となった両国の交流関係の高まりというものが、不幸にも第2次世界大戦で敵国となり中断されました。しかしこの平生が築きました偉業がなければ、戦前のこの礎がなければ、日本移民の戦後の受け入れももっと遅れたのではないかと思います。ご参考までに申し上げますと、講和条約といえますのは1952年(発効)ですが、ブラジルの移民再開は非公式ですが1947年、講和条約の前に政府はやっております。講和条約とともに1番最初に日本の移民を受け入れてくれたのもブラジルであります。この辺なんかも、平生が経済使節団としてブラジルに参りました時にブラジル側で対応した要人達が、戦後も政府の中枢にいたことによると思います。例えばヴァルガス大統領はこの戦後の時代にも大統領であり、最初に移民を受け入れています。このような人と人との繋がりが移民再開を早くさせていると言えます。それから60年後半から産業投資が活発になりますが、スムーズな受け入れもこういう戦前の姿勢があったからできたのではないかと思います。この辺を3つの偉業の総和としてお考え頂ければと思います。

急いでお話致しましたが、以上が平生のブラジルに関係しました業績、埋もれた業績でございます。偉業と申し上げていいかと思いますが、今日に続く日伯交流、この礎を、本当に平生は創ってきてくれたのだなあと、私は思います。最後にブラジルについてちょっとお話をさせていただきます。

(最近のブラジルと日本にとって大切な国ブラジル)

まずブラジルといえますと最近はBRICsという言葉でかなり認知度が出て参りました。私が参りました時代、1970年末から1998年まで、あるいは帰国のちょっと前までは日本の新聞にブラジルのことが出る事は余りなかったのですが、最近は毎日のようにたくさん出るというくらいに変わってきております。BRICsというのは、皆さんご承知のように、これはゴールドマンサックスがもう4年前になりますが、2050年にGDPがどうなるかという予測をしたもので、BRICsという言葉が有名になりました。そこにはトップは中国になって、ブラジルが5番目になるとございます。スライドのポイントは、中国、ブラジル1人当たりのGDPですが、ちょうど日本の昭和、高度成長時代のパーヘッドの状態が現在のBRICsの現状です。これは今後、こういうように伸びていくというのが、ワールドエコノミーの資料で

す。BRICsで有名になりましたが、もう一つは最近ブラジルに関して言われますのは、資源です。エタノール、鉄鋼石、食料等、色んなものが資源として取り上げられ、そうやってきますと今までのブラジルのイメージはサンバとかカーニバル、アマゾンだったんですが、資源というイメージが再び強くなってきております。ただ誤解がないように少しここで申し上げたいのは、資源だけでないブラジルです。ご承知のように資源価格というのが去年から1年ちょっとで倍位、物によっては3倍位になっておりますが、当然ブラジルの輸出、GDPも底上げされております。もちろんブラジルの貨幣もここ3年位で約倍くらいに切り上げをして、評価されております。数字的(米ドルベース)にはかなり伸びておりますが、それでも輸出構成品からいきますと機械がトップで、資源関係の構成比はまだ低いのです。それだけブラジルというのは工業国であって、しかも飛行機とか自動車、車両、こういう単価の高い製品が主力で、中国の低価の安いものとはちょっと違います。という事でイメージを少し付け加えていただければと思います。カナダの飛行機が盛んに新聞に出てきますが、ブラジルはこれを抜きまして世界1位になっております。

2番目はBRICsに関しまして最近新聞でも、BRICsの中にも差が出てきて、中国・インドは駄目だ、ブラジル・ロシアだよと出ております。しかし、例えばその他の国と比較してみますと資源も埋蔵量も世界最大で、今まで石油はなかったのですが、石油も輸出国に転じています。それから食料は断トツの純輸出国であります。この表にあります様に、ブラジルの輸出額はEU、USAに続き3位ですが食糧輸入額を差し引くと、ブラジルは1,730億ドルとアルゼンチン(1,320)を大きく上回るトップの純輸出額となっております。そして話題のエタノール、さとうきびですが、これも耕地面積はまだ無限にあります。統計によりますとまだ農耕地の4%位しかさとうきびを作っていないという事を言っております。それからエタノール・アルコール車ですが、最近日本でかなり議論されておりますが、私がおりました30年弱前から始まりまして、もう20年前にはアルコール100%燃料で自動車を動かしており、問題なくハイウェイも走っております。

もう一つBRICsの中で特徴的なのは地震がない事です。例えば他の国のハリケーン(自然災害)を考えますと、ブラジルがいかに自然の面でも恵まれてい

るかという事でありまして。それからBRICsの中で唯一原子爆弾を持たない国です。これは非常に大事な事だと思っております。後で申し上げますが、日本が世界の中で孤立しないために、やはりどこかと友達になって世界の中で地位を固めていく時に、ブラジルは最適ではないかと思っております。環境、平和をキーワードにした場合、この原子爆弾を持たないというのは大きなキーワードになるかと思っております。また、独裁政権もカーストも強権もなく、労働党政権が今大統領をやっておりますが、非常に民主主義で安定した国であります。BRICsの中でも比較しますと非常に際立った優位性を持っております。先程、平生の時代で中国・アメリカとの国際政治上の問題に触れましたが、現在も余り変わっていないような気がしますが、資源だけでなく、こういう何でもあつて大国で、日本が孤立しないように友達になってくれる国と言いますと、余り見当たらないと思っております。そういう意味では日系人が150万いて、関係も決して悪くないブラジルというのは重要な国ではないかと思っております。平生が国際関係はギブアンドテイクと言っておりますが、日本がブラジルを大切な国と思つて、これから世界の中で100年の計を進めていく中、単にテイクではなく、まず日本がブラジルにギブできる事はないかと考えるべきではないかと思っております。ブラジルは今盛んに経済的にアジアへ進出しております。日本を飛び越えて中国にどんどん行つております。ただ最近新聞なんかでも賑わせておりますが、ブラジルの大きな石油会社ペトロbrasが日本の会社を買収して、日本に基地を作っております。中国、東南アジアへの輸出製品を作るのですが、なぜ日本かと言ったときに、やはり信頼・信用が他のアジアの国よりも日本は強いからだと思うのです。先程から申しております、日本とブラジルとの信頼感と、そしてまだ日本人は捨てたもんじやないという気運が、この一年ぐらに出てきております。この信用力をベースにしてアジアとブラジルの仲介をしていく、これが一つのギブとして大事な事ではないかと思っております。

最後に私は平生の世界観、こういうものがもう一度見直されるべきではないかと思っております。なぜかと言いますと、平生の時代と今の日本の時代というのは非常に似ていて、どこへ行つていいのかわからないというのが、今の日本の状況かと思っております。スライドに比較を一覧してみました。

「平生の時代と今の日本の比較」

1. 資源の問題：
 - (平生の時代と変わらない)
2. 人口問題：
 - (逆の問題、32万人の在日ブラジル人ほか移民の受け入れ国家へ)
3. 国際的な位置づけ：
 - (中国、欧米との変わらぬ位置関係 孤立から無存在感へ)
4. 経済は輸出頼み地方は病弊：
 - (変わらない)
5. 方向の見えない日本：
 - (戦争か外交解決か、からグローバルかローカルかの選択へ)

資源の問題に関しましても綿から鉄になるかコバルトになるか、資源の中味が少し変わっただけあります。人口問題、今32万人の在日ブラジル人他、移民を受け入れるか受け入れないかという選択の時代にきていると思います。逆に小子化の時代になり、人口問題は変わりません。それから国際的な位置づけ、これもよく考えますと中国、欧米と変わらぬ位置づけになりうるし、この辺は戦前には孤立しましたが、孤立の仕方が違います。戦前は存在感があって孤立しましたが、今は存在感なく孤立していくような事になってきています。変な英語が数ヶ月前に雑誌にありました。ジャパンナッシングを縮めましてジャバッシングというような言葉が言われる案配です。「存在感から孤立へ」、こういうところにやはり平生の世界観というものがあるかと思っています。また輸出頼み、これもやはり変わりません。

このように今の日本の問題を考える、また個人がどのように生きるのかという時に、私自身も人生第三期という平生の言葉に励まされているわけですが、改めてたくさんヒントを持っている巨人平生ではなかったかと思っています。非常に拙いお話を申しあげましたが、ブラジルを通じまして平生というもの、また日本とブラジルの関係というものを少しでもご理解頂ければありがたいと思います。本日はご静聴大変ありがとうございました。

安西所長：

どうもありがとうございました。それではここで5分程度休憩致します。引き続き草野先生と小川先生にコメントして頂きたいと思います。

それでは時間がきましたのでコメンテーターとし

て本学経済学部教授、草野正裕先生にお話を伺いたいと思います。よろしくお願いします。

草野先生：

いまご紹介いただきました甲南大学経済学部の草野と申します。さきほどの栗田先生のお話には出てこなかった話題を2つだけ手短にお話させていただきます。

レジメを用意いたしました。一つ目は、Aというところで「宮尾進先生に平生・ブラジル・綿花栽培を聞く」というタイトルを掲げております。私は、2007年の6月の終わりから7月にかけて、平生、ブラジル移民、それから綿花栽培などについて調査する目的でサンパウロを訪れました。サンパウロ人文科学研究所、ブラジル日本移民史料館、移民博物館などを見学、資料の調査をいたしました。その折に、サンパウロ人文科学研究所の元所長宮尾進氏にインタビューを行いました。そのインタビューの録音を持ち帰って甲南大学の『経済学論集』に「研究ノート」という形で、関連の注をつけて発表いたしました。きょうは、その中からかいつまんでお話したいと思います。2007年6月26日でしたがサンパウロ人文科学研究所で宮尾先生と事務局の原さんという方にインタビューをさせていただきました。

宮尾進先生についてご存知の方はあまりおられないかと思いますが、レジュメに略歴を書いてありますが、簡単に申しますと、お父さんの代でブラジルに來られました。先生は、昭和5年のお生まれで78歳、もう間もなく80歳になられます。お父さんがすでにブラジルの第三アリアンサにおられ、そこで宮尾先生はお生まれになった2世ということです。実は戦時中一時期、日本に相続の関係で帰って來られ、戦後に、今の信州大学を卒業されました。昭和28年、そのころ日本は不況でしたがブラジルに帰国されたということです。その後ずっと主として日系の移民についていろいろ研究をされたり書物を著されたりされました。若いころに教師をされた後、いろいろな農業関係の学会誌や業界誌の編集をされ、後には編集長をされました。そして昭和40年、いまから43年前にサンパウロ人文科学研究所が創立されましたが、その設立に尽力され、後には理事、事務局長、所長をされました。10年くらい所長をされた後、現在は顧問という形で、貢献されています。その間に主として日系人の資料の収集をされ、それを紹介したり論文にまとめたり、本を著したりというようなことをしておられます。今も日系移民の方の

いろいろなお世話もなさっておられます。

その宮尾先生にインタビューをして、かなりの時間いろいろとお聞きしたのですが、ここでは、その関連のことを5つだけ紹介します。その1つは、平生ミッションがブラジルにやって来たことです。それまでブラジルでは主としてコーヒーを作っておりましたが、そのころ生産過剰でコーヒーの値段が暴落したので、コーヒーよりは綿花を作る農家が増えてきました。特に日系の移民の間でそういう傾向があったということですが、平生ミッションがやって来て、綿を栽培してくれば日本が買いますということで、日系の移民の方はそれにずいぶん励まされたのです。綿花栽培に携わる日系移民は、平生ミッションには非常に感謝しているということ、宮尾先生が仰っていました。

2番目も平生ミッションの関係ですが、どうして綿花栽培に至ったのか、コーヒーが暴落してそれで綿花のほうにシフトしていったということなんですが、ミッションのことは当時の日系の新聞なんかで報道されていたので、非常に多くの方がそういう事実を知っていて、日本の商社が買い付けて日本に輸出されるということで、日本の移民が非常に助かったわけです。実は日系の移民だけではなくて、他の国からの移民が作ったものももちろん日本に輸出されたんだと思いますが、やはり日系移民のものが量的には多かったようです。

それから3番目ですが、「契約労働から自営農へ」ということ、これもさきほど栗田先生のレジメに書かれていたと思いますが、最初は日系の農民は、家族単位で向こうに移住して、向こうの大きな地主（ファゼンデイロ）のところへいわゆる小作の形で農業労働者として契約労働をしたのです。1年ないし2年という短い期間の小作労働者、契約労働者として出稼ぎのつもりでやってきたのです。一財産出来たら、また日本に戻って故郷に錦を飾るつもりで大勢の方が移民されていたということですが、平生先生は、それではだめだと考えられていたのです。これは、あとで出てまいりますブラ拓も一貫して同じ方針だったと思います。日本で売らだしたブラジルの土地を、日本で買う契約をして、ブラジルに行ってその土地に入る。そして自営農として本気でブラジルで骨を埋めるという、そういう気持ちで一生涯懸命やらないとだめだと考えられたわけです。このように平生先生は契約労働から自営農の方向への政策を推し進めたいと考えておられたということで

す。

4番目は平生先生がレジストロという所に土地を買われたということです。これは、2,000坪とも言われ、かなり広い土地でした。そこを日系の移民の方が、多少利用させてもらったようです。詳細がよくわからないのですが、平生先生が、自ら進んで自営農への方向を示そうとされていたと思われます。ところが先生がレジストロに買われた土地は、戦後になっていつの間になくなってしまったのだそうです。実はそうなったことについて、当時のことをご存じの宮尾先生によると、日系のマリオ・サコウという人が土地を管理していたらしいのですが、戦中に敵性資産、つまりアメリカ、ブラジルと日本とは敵、味方の関係でしたので、敵性資産として官憲に収められたということがあって、どさくさに紛れて戦後にはなにもなくなってしまったらしいのです。宮尾先生が、あとで説明申し上げます南米銀行の宮坂氏のもとで働いていた人の未亡人からもられた資料の中にその土地の経緯、顛末について書いたものがあるらしく、宮尾先生はそれを読んだといわれるのです。読んでサンパウロ人文科学研究所に所蔵しておられたそうなんですが、知らない間に事情の分からない人がどこかに移動して片付けてしまったらしく、その資料が見当たらないそうです。その資料があったらぜひコピーして送ってくださるようお願いして、宮尾先生もそういうふうにして下さると仰るんですが今日現在まだ出てこないようです。これが出てきたら、何らかの形でご報告させて頂くつもりです。それから平生先生の評判という事ですが、それは綿花を買い付けてもらうことによって生活が改善されるので、日系の移民の間では平生先生に対する感謝の気持ちがあったようです。

最後に宮坂國人基金のことですが、宮坂國人さんという方はさきほど栗田先生も言っておられた平生の拾芳会の弟子で、平生邸（現甲南大学セミナーハウス）に書生として住み込んで、学費を出してもらって、以前の神戸高商、今の神戸大学へ通学されていたようです。宮坂さんは、さきほど栗田先生が仰ったように、海外移住組合連合会の専務理事だったのですが、その海外移住組合連合会の現地組織であるブラジル拓殖組合、ブラ拓で、日本からの移住地の経営にあたるということでずっとブラジルにおられたんです。その後ブラ拓銀行が戦後に発展して出来た南米銀行というのがありましたが、宮坂さんはそこで副頭取になられ、日系移民、日系社会の方

いろいろな形でたくさん仕事をされました。この方の名前をつけた宮坂國人基金というのがあります。その基金でいろんなところに資金援助が行なわれています。宮尾先生が書かれた本も宮坂基金から資金援助を得られているようです。平生先生はもちろん、宮坂國人さんも向こうで大きな功績があり、知られているということです。

時間の都合で急ぎたいと思いますが、レジュメBのヘンリー・ディランゲという方はベルギー、フランダース研究所の研究員をしておられます。石井寛治東大名誉教授、日本経済史では有名な先生ですが、その先生の指導も受けられたようです。9年前になりますが、1999年1月に「日伯貿易と対伯投資の原点—1935年平生経済使節団の成果—」というディスカッションペーパーを発表されています。これがインターネットで今、閲覧できます。栗田先生からその情報を教えていただいて、私の方で検索その他、いろいろ調べましたが、活字論文にはなっていないようです。レジュメの下のほうに、ヘンリー・ディランゲの他の論文というのをあげております。このなかに「1930年代後半における日本のブラジル綿輸入—日伯貿易と対伯投資の始まり—」という論文があります。これは『ヒストリアエコノミカ……』というポルトガル語の学術雑誌に英語で書かれていて、入手できないのですが、これがおそらくさきほどのディスカッションペーパーの完成原稿だと思います。これには、平生ミッションあるいは日系移民のことはあまり書かれていないかと思いますが、資源外交とか、日本からブラジルへの投資などの問題について平生使節団を例にとりて、世界に紹介してくれているという論文なんです。要旨はそこに書いてありますが、平生ミッションの目的は日米間の貿易バランスに配慮するということです。当時日本は随分輸入超過だったんですね。アメリカからばかり綿花を輸入するのではなくて、ほかの国との資源外交、例えばブラジルから綿花を輸入するという方向を平生先生も考えられたということです。実際はアメリカがだんだん輸出してくれなくなったという問題もあると思うんですが、しかしそういうことで、原料調達のための世界戦略を追求する、具体的には原綿をブラジルから輸入するというようなことであつたと紹介されています。ミッションの成果は、ブラジルからの原綿および関連品の輸入、そして逆にブラジルへの投資が劇的にふえたことです。ブラ拓なんかが代表的なものなんですが、もっと民間の

ものも含めて日本からブラジルに、どんどん投資が行なわれるという形で、日本とブラジルの貿易、或いは国際金融、対外投資が発展したのです。これがさきほど栗田先生が仰った戦後のブラジル繊維産業の発展に対して、非常に着実な基礎を提供したわけです。平生ミッションによる移民とか資源に投資するというようなことが、ある程度完成した形で行なわれて成功した、それが戦後の日本とブラジルとの貿易或いは対外投資の発展に随分大きく役立っているといった主旨で、ヘンリー・ディランゲがいろいろな細かい傍証を含めて大きな論文を書いてくれているということです。

もう一つ論文があります。「1955年—1980年のブラジルにおける日本の綿産業投資」についてというものです。これにも戦前の平生ミッションの果たした役割が少し書かれているようなんですが、なかなか手に入れるのが難しく、もし手に入れば翻訳紹介したいと思います。ディランゲのディスカッションペーパーのなかにもうすこし詳しいことが書いてあり、私も配布のレジュメのなかに、それをかいつまんで書いておきましたのでご覧ください。以上でコメントを終わらせていただきます。

小川先生：

小川でございます。大変時間が過ぎてお疲れのところと思いますけれども、もう10分だけご辛抱をお願いしたいと思います。私は昭和9年の3月に旧制の甲南高等学校の尋常科、中学ですね、それへ入学しまして昭和17年の3月まで在学しておりました。7年制高校ですけれど8年おりましたんで、1年ちょっと余分に学費を納めたわけでございます。その間、平生鈺三郎さんが校長を勤めておりましたね、当時平生さんは川崎造船所の社長をやっておりました。それは先程お話がありました様に平生さんは元々東京海上の出身なんですけど、川崎造船所が潰れかけて関西の財界から頼まれて川崎造船所の社長になったわけです。それでまあ見事に造船所を再建されたわけですが、当時の川崎造船所は今の川重、川崎重工業ですね、それと千葉の方にあり、移転しました川崎製鉄、この二つを一緒にしたものが川崎造船所でございます。それで関西で最大の企業だったわけですね。平生さんはその関西の最大の企業の社長になっておりました。そういう忙しい身でありながら、甲南高校の校長を兼ねておりました。名目だけの校長だけでなしに、週に1回必ず学校に

来ておられまして、そして朝会で当時甲南高校は中学高校あわせて500名だったんですけど、朝会に出て30分以上話をしておられました。それから学生食堂で学生と一緒に昼食を食べて、それから川崎造船所の方へ出勤するというので、週に1回は必ずそうして、甲南高校に顔を出しておられました。食堂ですぐ隣に平生さんが座ってましたんで、私は身近に感じてそんな偉い人やと思わずに、平生さんとか時にはガマさんなんて言うて、平生さんに叱られましたけど、ま、そういう存在でした。それで朝会ではよく政治の話をしておられましてね、平生さんは決して教訓、学生に教訓をしたり、修身のような話をしませんでしたけど、時局談をしておりました。それは生きた話ですので、当時非常に面白くて、我々楽しみにしておりました。平生さんは齒に衣着せず、当時の政府或いは陸軍を猛烈に批判しました。同じ事を大阪の自由通商協会というのを平生さんがやっており、今の商工会議所みたいなものですけども、そこ行っても同じ様に齒に衣着せず、陸軍と政府のやり方を攻撃しておりました。それでブラジル移民の話もよく高校の時に聴きまして、当時平生さんは先程栗田先生やら今、草野先生がお話されました様に、ブラジル移民協会の会長を務めてブラジル移民を推進しておったんですが、陸軍が当時満州移民を企てまして満州に100万戸、500万人を移住させると。結局は20万人位で終わって、ブラジル移民と同じ数で終わってしまったんですが、ブラジル移民を圧迫して満州移民をと。平生さんはそれに対して満州は3,000万人も既に中国人が住んでいるんだと、そういう所に押しかけて行ったら必ずトラブルが起ると。遂には戦争になるだろうと。そんな事をしはならんと。こういう事を甲南の朝会でも、自由通商協会でも公然と陸軍を非難しておりました。そしてブラジル移民こそ日本が世界に貢献する道であると。満州移民なんかやったら戦争になると。こういう事を言うておりました。ま、果たせるかな大変な事になったわけですね。満州移民は満州の中国人から良い土地を取り上げて、安い金で買って強制的に取り上げて渡しておったんですね。そういう事でしたから当時の新聞では満州は匪賊とか馬賊が横行しとると。そういう事から満州事変で満州を占領して満州移民した。それから満州を防衛するために北支へ進出したと。北支那ですね。北京からあの辺りに進出していった。それから上海にも陸軍は戦争を拡大していった。それから全中国と戦争になって日

中戦争になったわけですね。それから日中戦争から必然的に太平洋戦争になってしまったわけですね。平生さんの予言通りになっちゃったわけですね。それで昭和20年に日本が敗戦すると同時にソ連が満州へ侵入してきまして、20万人の日本移民は全滅ですね。集団自殺したり虐殺されたり、今わずかに当時の残った人は残留孤児として残って日本へ帰ってきたりしている。そういう悲劇に終わってしまったわけですね。ブラジルは日本人の移民を受け入れるのにブラジルも条件を出しています。それは親子三代が望ましい。おじいちゃん、おばあちゃん、それから息子夫婦とそれから小さい子供と。親子三代を受け入れたいと。それが優先条件だったと。ブラジルはブラジル国民としてブラジルの開発のためにブラジルの国の発展のために、日本人に来てくれと、受け入れたいと。平生さんはこういう所こそ日本人が進出すべき所だと。満州なんかは行ってはならんと。こういうことを強調したわけですね。それで現在ブラジル移民の日系人は180万人、ちょうどブラジルの人口の1%になっております。日本人は非常に皆成功してますね。知的職業にたくさん就いておりますね。一つの例を挙げますと、先程栗田先生のお話にありましたようにサンパウロ大学、これは学生が6万人と、教職員が5,000人と数からいうと世界最大の大学ですね。他に大学は余りないですからそういう事になったんかもしれないと思いますけども、そのサンパウロ大学の学生の15%が日系人だと。人口が1%にもかかわらずサンパウロ大学の大学生の15%が日系人だと。それから5,000人いる教職員、その内8%が日本人だと。ま、これだけ見ても日本人がいかに知的職業を持ってブラジルの社会に進出し、そこで貢献しているかという事が分かると思うんですね。その一つの例としまして、今年ちょうどブラジル移民100年祭ですけれども、今から50年前ブラジル移民50年祭というのがありまして、そこでその当時の大統領、クビチェックという大統領がその日本人の日本移民50年祭のブラジルでの大会に出席しております。そこで祝辞を述べております。クビチェック大統領の有名な話で演説なんですけれども、欧米人はブラジルにやって来て鉄道や道路を作ってくれた、しかし利益は全部持って帰ったと。しかし日本移民はブラジルに産業と農業と富をもたらした。ブラジル、先程今、世界最大の農業国と言われておりますけれども、日本人がブラジル移民した当時は農業はなかったんですね。コーヒーだけ

だったんです。ジャングルがあったんで、ジャングルから野生のトマトとかそういう物を取ってきて食べておったと。そういう貧弱な農業国、コーヒーオンリーの農業国。そこへ日本人が行って米やらきゅうりやらナスやら色んな物を栽培した。それでクビチェック大統領は日本の移民はブラジルに産業と利益のみならず、ブラジル人の食生活を大いに改善して健康を増進してくれたと。日はまた西から昇ると。ブラジルにとって日本は西の国ですね。日はまた西から昇ると、こういう有名な演説をしております。そういうブラジルですね。これはその基礎を築いたのが平生さんでした。これが政治というもんじゃないかと、こういうふうには思うわけです。私も7年前にブラジルを訪問しまして、そして現地に行って日本人会に出席もしました。その時驚いたですね。日本の内地にいる日本人には見られない様な素振りなんですね。それで私に色々質問がありまして「日本は大丈夫か」と。日本がちょうどバブルが崩壊した時でしたんで、「日本の経済大丈夫かと心配している」とそういう声を聞きました。本当に日本の事を心配していると。それから終戦直後日本が大変食糧難に陥りましたね。その時ララ物資というのが、占領軍によってもたらされました。日本ではマッカーサーが持って来てくれたと思ってますけど、ララ物資の大半はブラジルの日系人が寄付しているわけですね。そして終戦後も荒廃した食糧難の日本を助けておると。それから10年前に神戸に大震災がありましたですね、あの時もブラジルから真っ先に義援金が届いております。ブラジルの日系人は本当に日本の現在の我々日本人よりはるかに祖国愛に燃えていると、私は現地で実感しました。こういうブラジルこそ先程栗田先生がお話しました、世界で原爆を持たない大国は、日本とブラジルだと、私も今その話を聞きまして本当に感動しました。ブラジルこそ共に原爆を持たない、ブラジルこそ日本の盟友としてもっともっと交流、協力すべき国ではないかと。改めて私は深く最近そう思っているわけでございます。どうか皆さん方もブラジルにもっともっと関心を持って、ブラジルから今、逆に移民を受け入れております。この間もそういう移民の会合に行きましたら、日本は冷たいと、健康保険がないので我々は病気をしたら大変な事になるんだと、こういう事を言うておりました。もっともっとブラジルと日本は世界の原爆を持たない同盟国として協力し、お互いに交流を進めるべきでないかと私はそう

いうふうに深く感じております。皆様方に訴えたいと思います。これで終わりとさせて頂きたいと思えます。どうもありがとうございました。

安西所長：

どうもありがとうございました。栗田先生、なにか付け加えることはございませんでしょうか。フロアの方で、二、三、もしご質問ございましたらお手をお上げ下さい。時間は充分ないんですけども。また今日は学長が来ておられますので、前甲南学園平生研究会の委員長でもあられた高阪薫学長に一言ご挨拶をお願いしたいと思います。

高阪先生：

皆様こんにちは。今日はお暑い中大勢お出で下さりまして非常にありがとうございます。平生研究会は、平生鈺三郎先生の日記翻刻、出版、研究以外にですね、甲南に関係してくる平生の他の業績や、資料収集など、いろんな問題を扱って、総合研究所も大きく関わりまとめられて、平生の研究が続いております。実は創立80周年記念の時の理事長でいらっしたのが、小川先生でありまして、その下で私は常任理事をして、また平生研究会の代表を続けていました。現在、安西先生が所長と兼任で代表をいただいておりますが、そういう経緯があって、その中でいろいろ各学部の先生方、それからこうしてOBの栗田さん、あるいは東大や阪大や名古屋大学等の研究者が集まってきまして、いま研究会は隆盛を極めております。ただですね、先程来お話を伺っていて平生さんが色んな面で、多岐にわたって活躍しておられて、なにかがどれが専門なのかということ、それぞれの専門家はその立場から研究発表されて、それなりの平生像を描出しています。しかし平生さんの全体像をとると、究めるのは非常に困難な人物であります。それで最近私は巨人だなあと。巨人・平生鈺三郎。で色んな意味で日本人の有名な中には捉えきれない怪物がいますけれども、例えば粘菌学・民俗学者の南方熊楠なんてその一人ですね。平生さんもまた非常に捉えきれない怪物の一人だなあと、最近つくづく思ってるんですね。実は栗田さん執筆の日経新聞の配布資料、読んで頂いたと思います。昭和天皇に接見された記事ですけども、ブラジルの話を昭和天皇にされた時にですね、ブラジルってどんな国か、と問われたときに、広大なブラジルを説明するのに「ブラジルなんて一、やあー

あんた」って自然にこう言って、天皇に「あんた」なんていう言葉を言えるぐらい並外れた人間なんです。戦前期にあつては、おそらく恐縮してかしこまって話をしなければならぬ状況にあつたにかかわらずですよ。それで先程私は南方熊楠と言いましたけれども、昭和天皇に実は「あんた」って言った人があと2人いるんですね。その一人が、無造作にキャラメル箱に入れた粘菌を説明した時の南方熊楠で、もう一人が真珠王の御木本幸吉だったそうです。いずれも泰然とした偉人であり、怪物ですけれども。そういうふうには、やっぱり超越した人物というものは、それだけで存在感というものがある、ぞんざいな言葉遣いですが、純粋な人柄が滲み出ていて、承服する、納得するものを持っていることなのでしょう。恬淡として動じないという平生さんが、私どもの創立者であるということ、私は非常に誇りに思っております。その平生さんは生涯私欲私利に走らず、「正しく強く朗らかに」を人生訓に誠実に生き抜いています。ますますこれは研究され尽くさなければならぬと思っております、平生日記の刊行が急がれるわけですが、本日は本当に有意義な話を栗田先生、あるいは草野先生、小川先生からしていただきまして私も非常に勉強になりました。どうもありがとうございました。

安西所長：

どうもありがとうございました。それでは講演会はこれで終わります。11月8日には秋期講演会を開催致します。また皆様よろしくご来場くださいますようお願い申し上げます。ありがとうございました。

(以上は2008年7月26日(土)甲南大学813講義室において開催された講話に基づく)

平成20年度研究チーム概要

◎研究課題 (No.106)

「大学教育における学習への動機づけ研究—甲南大学の教育効果を高めるための1つの試み—」

*研究の目的

「動機づけ」は、教育分野においても重要なテーマとして研究されてきた。どのような分野であれ、学習がおこるときには、その理由、意欲の度合い、効果や継続について動機づけが深く関与しているからである。われわれは、高等教育、とくに大学教育において、学生たちが専門教育や外国語教育に「やる気」を感じ、それを持続させ、一定の成果を達成するために、高等教育独自の動機づけ研究が重要であると考えている。そのためには、内容関与的な動機づけを高め、知識を主体的に構成していくことに喜びや楽しさを感じる、「くじけない学習者」「自律的な学習者」に学生を育てていくことが肝要であろう。本研究では、教育学的視点、社会学的視点、および言語教育研究の視点から、学際的協力によって、大学生の学習における動機づけの本質に迫りたい。

*研究の内容および効果

教育社会学、教育心理学、外国語教育学の視点から、学習動機づけに関する最近の研究動向を把握すること、さらに、大学生、とりわけ甲南大学生の学習動機づけ全般を量的に調査する質問紙の作成、実施、その分析を行う。主体的に学習に取り組む甲南大学生養成のための基礎研究としたい。

*総合研究として研究することの必要性

専門教育であれ外国語教育であれ、そこに参加する学生は同一である。学習者の動機づけを分析する際には、個別の分野に対する学習意欲にフォーカスを当てる研究と同時に、その相互の関連性および学習者の全体的な学習意欲や生活状況についての理解も必須である。この意味で、学習動機づけ研究には、関連する分野の研究者による学際的協力が不可欠である。

*研究チームメンバーと所属と研究課題

藤原三枝子 (研究幹事)	国際言語文化センター	外国語担当教員の「継続的能力開発」のための基礎研究
平松 闊	文学部社会学科	大学生に対するアンケート調査等社会調査の実施と分析
原田登美	国際言語文化センター	日本語教育の現状と今後の課題
森田昌美	国際言語文化センター	外国語担当教員のプロフェッショナルリーダーの形成

◎研究課題 (No.107)

「大学とメディアとの新たな連携を求めて——教育・研究・社会貢献」

*研究の目的

21世紀に入り、大学のありようとその変容が目に見えるようになってきた。しかしながら、その変化に大学側、とりわけ教員の認識が追いつかず、ゆえに変革が遅れているという批判がよく聞かれる。グローバルに大学の格付けがなされるようになった今、われわれ大学教員はどこを見て、何をすればいいのか。その解決の糸口を、今なお未開拓である「大学とメディアとの連携」に見いだそうというのが、本研究の目的である。

*研究の内容および効果

上記のように、大学とメディアとの連携に大学と大学人の新たな可能性を探る試みは、まだ本格的に着手

されていない。読売テレビと関西大学との提携講座が「斬新な」試みとして取り上げられてはいるが、それに対するメディアの専門家のコメント（『毎日新聞』夕刊2008.1.18）にあるように、今求められているのは、一大学と一メディア企業との連携を超える、幅広い連携の形であり、手法だといえる。

われわれはメディアが伝える出来事や事件を「事実」として受けとっている。換言すれば、メディアこそ、われわれの「現実・リアリティ」（あるいはそうだと思っているもの）を創り出しているといえる。このことをマイナスにとらえるのではなく、今の時代に即した大学教員の教育・研究・社会貢献のありようと結びつけて考え直してみると、われわれの前にどのような可能性が、また新しいビジョンが、拓かれてくるのだろうか。本研究ではそれを多様に模索してみたい。と同時に、メディアとの新たな連携を通じて、「大学と大学人の変革」を「大学生の活性化」と結びつける手法も、研究成果として提示できると考えている。

そのために、中之島の大阪大学医学部跡地に作られつつある新しい街メディア・シティと、そこで計画されているソーシャル・リバー・アカデミー（SORIA）構想とに連携し、大学人・メディア・企業・学生・ステークホルダーなどそれぞれの立場を組み込む形で、大学の教育、研究、社会貢献とは何かを議論したいと考えている。メディアスクール、世直し塾など、中之島街に関してすでに動きはじめた「知の構想」と連携するなかで、大学と大学人、そして学生とステークホルダーに対して、甲南大学に見込まれる新たな可能性も提案できると考えている。

*総合研究として研究することの必要性

従来の射程を超えて大学教員とメディアとの関連、連携を問う本プロジェクトには、志を同じくする幅広い人材が不可欠である。また、上記に記したように、SORIO構想に参加しているメディア関連の文化人や知識人にも協力を仰ぎたいと考えており、その意味でも、甲南大学内部に多様な人材を求める次第である。

*研究チームメンバーと所属と研究課題

井野瀬久美恵（研究幹事） 文学部・英語英米文学科

19世紀後半から20世紀初頭にかけて大英帝国が世界各地に発信した情報メディアに関わる思想や概念、制度や枠組みの再考を通じて、新たなメディア連携を考察する。

岡田元浩 経済学部・経済学科

諸々の政治・社会体制の護持もしくは変革にとって、それらに適合する経済思想の大衆への喧伝が鍵を握ることは、卑近な例としては、「小泉改革」などにも如実にあらわれた。今回の研究では、歴代の経済思想がどのようなメディア戦略を通じて普及されようとしていったかを、考察していきたい。

河崎照行 会計大学院

企業のメディア戦略（電子情報開示とCSR）の研究を通して、大学のメディア戦略（大学の社会貢献とメディアのコラボレーション）のあり方について考究する。

胡金定 国際言語文化センター

変化しつつある中国の大学と日本の大学の比較研究をする。また中国の大学と中国のマスメディアとの連携についての現状を調査研究する。

中村典子 国際言語文化センター

フランス国立視聴覚研究所（INA）は、2006年4月から約10万件のアーカイブの音声・映像資料を世界中にネット配信するサービスを始めた（80%は無料）。こうしたフランスのメディア

西田英一

法学部

文化事業のあり方を調査すると同時に、フランスの各大学がどのようなメディア戦略を立て、他大学との差別化を図り、特色ある教育を推進し発信しているかを考察し研究する。

紛争当事者が問題を定義し、その解決を図ろうとするときの重要資源の一つが「知識」である。誰に何を求めうるのか、そもそもどのような問題なのかといった認知の変容過程として紛争をとらえた上で、日常的なメディア接触が紛争知覚にどう関わっているのかについて考察してみたい。

柳原初樹

国際言語文化センター

20世紀のドイツ・ナチズムは映像による宣伝を徹底的に利用し、「メディアによる神話」を創出した。その反省から、戦後ドイツのメディアは、日本に比して歴史認識への責任を過剰なまでに自覚している。そんなドイツと比較しながら、歴史分野の報道における大学とメディアとの連携を考察したい。

渡邊栄治

理工学部

人工的な学習モデルである階層型ニューラルネットワークの学習法と画像処理への応用、メディアに対する受信者のモニタリング手法の開発（挙動や顔の動きから、興味を持って聞いているのか否かを自動的に判定したい）。

◎研究課題 (No.108)

「高齢者の認知機能に及ぼす歩行運動効果の電気生理学的研究及びバイオメカニクス的研究」

*研究の目的

わが国における2006年の平均寿命は男性79.0歳、女性85.81歳であり、日本人の寿命は延びる一方、認知症に対する危惧も否めない。わが国における認知症の罹患者数は150万人を超え65歳以上の高齢者での有病率は3.0～8.8%と言われている。高齢者の健康増進や脳の活性化には、軽度の歩行運動が効果的であることは報告されているが、歩行運動がどの程度の認知症レベルの患者まで効果的であるのか、認知症レベルにより活性化する脳のパターンは異なるのか、また認知症レベルにより歩行動作にある一定の特徴がみられるのか、は明らかではない。そこで本研究では、これらから認知症と歩行動態の関連性を明らかにし、認知症の早期発見、予防に役立てていきたい。

*研究の内容および効果

－高齢者の認知機能に及ぼす歩行運動効果の電気生理学的研究－

自覚的検査により記憶・学習作業の各過程における歩行運動の効果を評価し定量化を行う。また、多チャンネル脳波計およびMRIを用いた他覚的検査により歩行運動の記憶・学習に対する効果機序を明らかにすることを目的とする。

－高齢者の認知機能レベルの違いにおける歩行動作三次元解析－

認知機能を定量化した被験者に対し、トレッドミル上にて歩行運動を実施させる。その際、ビデオカメラにて前額面及び矢状面から撮影し、コンピューター上で三次元解析を行う。

本研究により、加齢と記憶・学習機能との関わり、および認知障害の予防および機能改善に対するウォーキングの有効性を調査する実験プロトコルが確立する。また、歩行動作と認知レベルとの関連性が明らかになることで、認知症の早期発見にもつながる。

***総合研究として研究することの必要性**

甲南大学には、スポーツ・健康科学教育研究センター実験室には、高度な動作解析装置や筋電図測定装置が設置されている。しかし、認知機能レベルを解析するための高額なMRIや脳波計測装置などは有していない。そこでMRIや脳波計測の専門である前田多章准教授と共同プロジェクトにより装置を相互に利用できる関係があれば、学園の現在保有している実験装置により相乗的な効果を生み出すことが出来るのではないかと考えている。

***研究チームメンバーと所属と研究課題**

曾我部晋哉（研究幹事） スポーツ・健康科学教育研究センター

前田多章

知能情報学部知能情報学科

アルツハイマー患者における、歩行時の三次元動作解析および加速度計を用いた加速度の測定
認知症レベルの違いにおける歩行時の脳波計測

◎研究課題（No109）

「会社法理論とファイナンス理論の相互作用の国際比較」

***研究の目的**

平成17年に成立した会社法ではファイナンス理論を全面的に採り入れ大幅な規制緩和がなされているとされている。日本におけるこのような会社法の立法姿勢が国際的にどのように位置づけられるのかを明らかにする。

***研究の内容および効果**

本件研究の内容として、i 日本の会社法制に採り入れられたとされるファイナンス理論の検証、及びii 各国において会社法制はどのようにファイナンス理論と対峙しているのかに関する比較的研究を行う。ファイナンス理論としては、配当政策が企業価値に影響を与えないとする理論、オプション発行に関する理論、会社の資本構造が企業価値に影響を与えないとする理論等を対象とする。比較法としては、日本とヨーロッパ諸国（主にイギリス、フランス、ドイツ）においてアメリカの法制度がどのように影響しているかの検討を行う。

世界的な規制緩和と国際的な法の融合という名の下における『アメリカ化』の潮流の中で各国がいかにして法制度の独自性を維持しているのか又は維持することを放棄しているのかという観点から分析する。効果として日本の会社法の国際的な位置づけを示すことができる。

***総合研究として研究することの必要性**

研究員（家田崇）は会計大学院に所属しておりファイナンス理論から日本の会社法の研究を行っている。研究員（山本真知子）は法学部に所属しておりヨーロッパ会社法の研究を行っている。各研究員の研究を総合することによって「会社法理論とファイナンス理論の相互作用の国際比較」という研究課題をより高いレベルで達成することができる。

***研究チームメンバーと所属と研究課題**

家田崇

会計大学院

新株予約権の法制度と会計基準、敵対的企業買収に関するファイナンス理論と会社法制

山本真知子

法学部

企業再編時における多数派株主と少数派株主の利益調整の問題（フランス会社法における少数派株主保護、アメリカにおける株式買取請求権等）

平成19年度研究チーム活動中間報告（第2回目）

「痛みの情報処理過程における鍼鎮痛の作用機序－多チャンネル脳波計による責任部位の同定－」

No.104 研究幹事 前田 多章（知能情報学部）

①研究の背景と目的

多くの疾患やその治療において、痛みの抑制は重要である。痛みの抑制には、鎮痛薬を用いた薬物投与、神経ブロック療法およびレーザーによる物理的鎮痛療法と並び漢方薬や鍼による東洋医学療法が用いられる。なかでも鍼による鎮痛は鍼鎮痛としてその効果とともに副作用の少ない点が評価され、臨床応用が行われている。

当該研究では、鎮痛効果を誘発する最適経穴および当該経穴刺激により誘発される鎮痛作用の発現部位を調査するとともに、最適刺激条件を調査する。続いて、得られた最適条件下で、鎮痛作用時の体性感覚強刺激（鎮痛作用がない場合には痛覚となる刺激強度）により誘発される脳電位を計測しその発生源を推定することにより、鎮痛効果の作用部位を同定し、鎮痛機序を明らかにすることを目的とする。

②2008年4月～12月に実施した研究の内容および結果

2007年度は、鍼鎮痛で用いる経穴を対象に、経皮的電気刺激により優位に鎮痛効果が起こる作用部位を心理物理学的手法を用いて調べた。採用した経穴は、合谷であり、痛覚刺激部位として上唇挙筋を経皮的に電気刺激した。また、痛覚刺激により誘発された脳電位（鎮痛作用が有る時と作用していない時）を多チャンネル脳波計により記録し、MR画像とマッピングし比較検討した。この結果、鎮痛作用に由来すると考えられる脳活動を観察した。2008年度は、2007年度実験の問題点を洗い出し、実験パラダイムの最適化を進めるとともに、鎮痛作用由来の脳活動を明らかにすることを試みた。

I. 対象

21～23歳の健常成人6名（男性4名、女性2名）を対象とした。被験者には、甲南大学におけるヒトを対象とした研究に関する規程に基づき、予め実験の趣旨および方法を十分に説明し、同意を得て行った。

II. 方法

(i) 研究実施場所

甲南大学理工学部情報システム工学科 13号館MRI室。

(ii) 刺激条件

電気シールド室内の被験者に、ディスプレイ型皮膚電極を用い3ch電気刺激装置で電気刺激を行った。2007年度に採用した、鍼鎮痛で用いる経穴『合谷』と痛覚刺激部位『上唇挙筋』の組合せでは、痛覚刺激部位が脳波導出電極に近い場合、電気刺激時に痛覚刺激が脳波に混入するといった問題があり、早期性分の観察が困難であった。そこで、別の鎮痛刺激経穴候補を洗い出し、鎮痛効果を調査し、最も効果のあった経穴および痛覚刺激部位（鎮痛作用部位）を採用した。

(iii) 計測条件

鎮痛刺激経穴と鎮痛作用部位に、経皮的電気刺激を行い、刺激強度を感覚閾値から痛覚許容値の間で強度を変えて、自覚的検査を行い、感覚閾値、筋単収縮強度、痛覚域値、痛覚許容値を計測した。

電気生理学の実験で、自覚的検査により得られた最適鎮痛経穴－作用部位に対する刺激により、全頭皮上から脳電位を計測した。電気活動の計測はデジタル脳波計を用いて行った。

(iv) 解析・結果

電気生理学的実験では、MRIおよび脳波解析システム（多チャンネル脳波計、脳内等価電流双極子推定ソフトウェア、誘発電位研究用プログラム）を用いて解析を行った。脳波解析システムを用いて、鎮痛条件下、非鎮痛条件下で、痛覚刺激時の脳電位の発生源を推定しMR画像とマッピングし比較検討した。これにより、鍼鎮痛の作用機序を研究するのに適した『経穴-鎮痛作用部位』を見出すとともに、2007年度に観察した鎮痛作用に由来すると考えられる脳活動に類似した脳活動を観察した。この結果、当該脳活動が、経穴刺激による鎮痛作用由来の脳活動である可能性を改めて確認できた。

「バルク敏感光電子分光による1次元構造を持つホーランダイト型バナジウム酸化物に見られる金属絶縁体転移の起源解明」

No.105 研究幹事 山崎 篤志 (理工学部)

【序論】

これまで我々は、最近になって合成に成功した新物質であるホーランダイト型バナジウム酸化物に注目して、この物質の特性を硬X線光電子分光という実験手法を用いて調べてきた [総合研究所報47号参照]。

ホーランダイト型バナジウム酸化物 $K_2V_8O_{16}$ は、最近純良単結晶の合成に成功し、温度 $T=170K$ において正方晶から斜方晶への構造相転移を伴う金属絶縁体 (MI) 転移が観測されている物質である。一方、カチオンであるカリウム (K) をルビジウム (Rb) に置き換えた場合、転移温度は230Kに上昇する。しかし、これらの物質に見られるMI転移のメカニズムは未だ明らかになっていない。このようなホーランダイト型バナジウム酸化物に対して、詳細な電子構造を明らかにすることは、MI転移のメカニズムを解明する上で重要であるばかりでなく、バナジウム系酸化物全般の系統的な物性の理解に重要であると考えられ、学術的に意義深い。また、MI転移温度や電子構造を適当なカチオン種を選ぶことによりコントロールできれば、微小電流により制御可能な温度センサーの材料となるなど工業的な応用に興味を持たれる。

ホーランダイト型バナジウム酸化物の特異な物性を司っているものは、構成元素であるバナジウム (V) が持つ1個もしくは2個の3d電子であると考えられる。d電子の個数はVイオン価数により変化し、 $K_2V_8O_{16}$ では3.75価、すなわちd電子1個を持つV原子とd電子2個を持つV原子の比が3:1となるように結晶中に存在している。3d電子は原子の最外殻を形成する電子であり、自由原子の場合には原子核に束縛されて局在しているが、結晶中においては周囲の環境により遍歴性を示す場合もある。5つあるd電子の軌道はV原子を取り囲む酸素 (O) 原子の作る結晶電場により、エネルギーの低い3重に縮退した軌道 (t_{2g} 軌道) とエネルギーの高い2重に縮退した軌道 (e_g 軌道) に分裂する。ホーランダイト型バナジウム酸化物では、この3つの t_{2g} 軌道にd電子が収容されている。これらの軌道の占有状態の詳細を明らかにすることは、ホーランダイト型バナジウム酸化物が示す特異な物性を理解する上で極めて有効であると考えられる。

【目的】

今回、我々はホーランダイト型バナジウム酸化物のV3d電子の軌道占有状態に関する知見を得ることを目的として、大型放射光施設SPring-8(兵庫県佐用郡)においてX線吸収分光 (X-ray Absorption Spectroscopy : XAS) および光電子分光 (Photoemission Spectroscopy : PES) の偏光依存性実験を実施した。

【実験方法と実験結果】

XASとはX線 (今の場合には、エネルギーが500eV程度の軟X線と呼ばれる領域の光) を物質に照射したときに構成元素の種類に依存して特定のエネルギーの光が吸収される現象を利用した分光実験である。ホーランダイト型バナジウム酸化物に対しては、V2p-3d XASおよびO1s-2pXASスペクトルの測定を行った。これは、V2p内殻準位から非占有3d状態およびO1s内殻準位から非占有2p状態への電子の遷移を見ていることになり、電

子の非占有軌道の状態に関する知見などを得ることが出来る。一方、軟X線を用いたPES実験は先に行った硬X線光電子分光と同様に光電効果を利用した分光実験であり、電子の占有軌道の状態を調べることが出来る。これらの分光実験について、用いる軟X線の偏光を試料に対して垂直と水平に変えて、両者の違いを調べた。

実験では、 $K_2V_8O_{16}$ においてXASとPESスペクトルともに高温金属相において明瞭な偏光依存性を観測した。また、低温絶縁体相においてはXASスペクトルにのみ偏光依存性が観測された。高温金属相と低温絶縁体相でのスペクトルの振る舞いの差異はホーランドイト型バナジウム酸化物における金属絶縁体転移に伴う急激な電子状態の変化を直接示しており、今後これらを解析していくことでこの物質系の金属絶縁体転移における種々の知見が得られるものと期待される。

[今後の研究方針]

今後、得られた実験結果を詳細に解析し、ホーランドイト型バナジウム酸化物の電子状態を明らかにすると共に、金属絶縁体転移の起源に関する考察を行う。また、これらの研究結果については、日本物理学会および強相関電子系国際会議等で発表すると共に投稿論文としてまとめる予定である。

なお、本研究における放射光利用実験は財団法人高輝度光科学研究センターの承認（承認番号2008A1421および2008B1149）を得て、SPring-8のBL27SUにおいて実施されました。

以上

(

(